「茶旅」"こぼればなし"

(33) 富山 バタバタ茶の深まる謎

コラムニスト　須賀　努

先日4年ぶりに富山県を訪れた。以前と違い、今は新幹線が開通し、東京から3時間弱で富山駅に着いてしまう。随分と便利になったものだ。今回も前回と同様、目的地は富山市ではなく、新潟県との県境にある、朝日町。ここにはバタバタ茶と呼ばれる、極めて特異なお茶、というより、茶文化が残されている。

バタバタ茶については既に2015年12月号『広西の六堡茶と富山のバタバタ茶』で書いているが、4年前の訪問で、いくつもの疑問が沸きあがってしまい、それは常に心の片隅にずっと残っていた。今回の再訪を機に、そのあたりを整理し、地元でその疑問を率直にお話ししたところ、多くの方に関心を持って頂けた。

最大の疑問は『なぜ黒茶が使われているのか』である。バタバタ茶はいわゆる振り茶に分類されるが、日本に殆どない黒茶を使っている点が実に興味深い。日本の後発酵茶と言えば、四国にわずかに残っているだけで、一般的なお茶とは思われない。沖縄のぶくぶく茶のように地元で作られていなくても、普通に飲まれる材料を使っているのなら理解できるが、バタバタ茶の場合、以前は地元で生産せず、福井から購入していた点が気になっている。

今回朝日町や富山の方々に広西の六堡茶を飲んで頂いたが、ほぼ一様に『バタバタ茶に似ている』との反応だった。茶筅で泡立てなければ、確かにほぼ同じ味かもしれない。マレーシアの華僑などに好んで飲まれる六堡茶だが、元々は価格の安い辺境茶。新疆やチベット、モンゴルなどで飲まれる辺境茶がいずれかのルートで日本へ渡ってきたのだろうか。

そして前回書いた蛭谷を『びるだん』と読む理由だが、沖縄の谷茶『たんちゃ』だけでなく、富山県では普通に「谷をたん」と読み、隣の福井県でもたんと読む地域があることが分かった。むしろ茶葉生産を行っていた福井との繋がりが強く想起される。蛭谷の人々は1800年代に木地師の一団が渡って来て住み始めたとの説があり、福井県にも蛭谷という地名があるようだ。沖縄と富山をこの点だけで結びつけるのは少し早急だったかもしれない。

ただ江戸時代、薬売りで名を馳せた富山。漢方薬の生薬を手に入れるために、当時の琉球まで買付に行っており、その交易品として持ち込んだのが、北前船による蝦夷の昆布だったという話がある。現在でも沖縄では採れない昆布がクーブイリチー（昆布の炒め煮）となり、名物料理になっているのはそのためであるらしい。その漢方の生薬の中に黒茶が紛れ込んでいた？そんな高価な物を一般庶民が飲むことなどあるだろうか。

茶筅で泡立てる『振り茶』という繋がりで言うと、松江のぼてぼて茶、沖縄のぶくぶく茶が有名。昔は日本全国に振り茶の風習があったと言われているが、現在何故この3つの地域に残ったのだろうか。ぶくぶく茶は戦前一度途絶えたものを復活させたと聞く。松江はどうだろうか。いずれにしても宗教的習俗と言われるバタバタ茶とは流れが違う。

写真：朝日町蛭谷 バタバタ茶伝承館にて

因みに中国には擂り茶の風習が残っている。穀物やゴマなど擂り潰して、茶と一緒に飲む擂茶、台湾では客家の茶として名が残っているが、元々は客家ではなく、湖南省あたりの少数民族の風習だったと聞く。また湖南省、湖北省、そして広西壮族自治区などを歩いていると、打油茶などの食べ物に出会うことがある。これも今風に言うシリアルに茶を交ぜて食べる物である。

日本の振り茶も、元々は農家が忙しい朝、飯代わりに茶と穀物を交ぜて飲んで農作業に出掛けたとも聞くが、バタバタ茶には穀物などを交ぜる習慣がなく、代わりに？美味しい漬物が出てきて、お茶請けとして食べている。このあたりは宗教の関係なのか、それとも振り茶と言っても全く違うものなのか、何ともよくわからない。

バタバタ茶に使う五郎八茶碗はどこから来たのか。松江郊外の布志名焼が使われていたとの話も聞いたが、これも北前船の交易の影響だろうか。今では地元で作られた茶碗を使っているが、松江と聞くとぼてぼて茶との関連を連想してしまう。いや五郎八茶碗は元々瀬戸あたりで作られたもので、どこにでもあると言われてしまえばそれまでだ。

バタバタ茶については、はっきりした歴史を掴めずにいる。どんどんパズルのピースだけが積み重なっていき、結びつきそうで結びつかず、独り歩きしそうな状況である。しかしこれほど興味深い茶文化はあまり見たことがない。今後も折に触れてピースを磨いていき、パズルに嵌るようにしてみたいと思うのだが、これはかなり難しい。

（すが　つとむ）